

## 令和2年度第5回鳥取県教育審議会学校等教育分科会議事録

- 1 日時 令和3年1月18日(月)午前10時から午前11時30分まで
- 2 会場 とりぎん文化会館第3会議室
- 3 出席者 小椋分科会会長、尾崎委員、田中靖委員、中村委員、藤田委員、松岡委員、松本委員、山根委員、田中宏委員、西川委員  
(米子白鳳高校)松田校長  
(教育委員会)足羽教育次長  
(高等学校課)酒井課長、福本室長、尾崎課長補佐、徳永指導主事、石原指導主事

### 4 要旨

#### (1) 定時制・通信制課程のあり方

- 定時制・通信制には、支援の必要な生徒にとっての仕切り直しの場、働きながら、または育児をしながら就学できる場、専修学校のダブルスクールとしての場としての役割がある。
- 個別の手厚い支援を行い、中学まで自己肯定感が少なかった生徒に「自分もやれる」という成功体験や自己有用感を経験させて、成長・自立へ導くことが重要。
- 一人一人能力も環境も違う子供たちを社会とつなげるよう、自立させるための支援が必要。
- 定時制の卒業生の多くが県内に就職をしていることから、ふるさとを支える人材を送り出すこともミッションの一つである。
- 生徒への個別支援等が継続して行われるよう、学校への手厚い人的支援が絶対必要である。
- 定時制高校にはPTA組織が無いが、保護者同士で困り感などを話し合っただけで気持ちをなごませる場があると望ましい。
- 全国的に定時制・通信制にはPTAがないので、鳥取県に出来ると面白い試みになると思う。県というスケールメリットを生かし、東部と西部の保護者がつながることもできるだろう。
- 定時制・通信制では子供への支援だけでなく、保護者への支援も重要である。
- 定時制・通信制が不登校や中途退学者のセーフティネットになっており、SDGsの誰一人取り残さない考え方においても必要なものである。
- 定時制・通信制の定員は現状のままで、入学した生徒に対するきめ細かい対応が大事。
- 社会との繋ぎの部分の充実が課題である。
- 就職段階の支援までではなく、就職した後も定着するための支援が大事。特別支援学校では、定着支援員がしっかり事業所や企業を回って、その活躍や活動を支えている。
- 学校から籍がなくなると支援の継続が困難となる。その際の方策を検討すべき。
- 定時制・通信制の子供たちの実態を知らない人が多いであろうことが課題のひとつである。
- 学力が高いことも素晴らしいが、共生社会の大事な観点として、絵が描けたり詩を読めることを大きな特性として生き方に繋げている人もいる、ということを発信していくことが必要。
- 「自分もやれる」と子供たちが思うようになる学びを提供していくため、定時制・通信制は絶対に必要。
- 定時制・通信制の場合は、地域に出ていくことで、コミュニケーション能力や、人との繋がりなどを学ぶので、体験的な活動の継続と支援の仕組みが必要である。
- 自己肯定感を高めるための「定通教育充実事業」は学校にとってとても有効で、生徒にとっては嬉しい事業であり、継続が望まれる。
- 定時制の生徒には、多様な環境を知り、将来につなげていくことが大事なので、社会へ送り出すまでに体験を十分にさせておきたい。
- 定時制・通信制に限らず、全日制にも在籍している支援を必要とする生徒たちに対する対応を広げていくためにも、定時制・通信制のあり方はすごく大事である。

## (2) ICT や先端技術を活用した学び

- 教員を長年務めると、授業方法を一気に変えることによって、目の前の生徒たちに不利益があってはいけないと考えて使用をためらい、積極的に活用されないということがある。
- 新しいものを取り入れる際に問題は生じるが、進めるためにはどうやって活用していくかということを前向きに考えていくことが大切である。
- ICT をスムーズに導入できるように、専門員を多く育成し、それぞれの学校に配置するべき。
- ICT は、まず教員たちに使ってもらうことが大事。タブレットは文房具の一部と考える。
- 若手教員が生き生きとしてベテラン教員に教える姿もあり、双方向に良い関係になっていると感じる。
- OECD の調査で、日本の子供たちはパソコンの学習での利用率は最低だが、遊びに使うのは最高であることから、リスクばかりを取り沙汰することなく、学習にも使えるということをもっと意識して使っていくといい。
- 学びの不公平感をなくす観点での教員養成が必要である。
- BYOD で端末を持ち込むことを、パーティーでコミュニケーションするためにいろんな飲み物を持ち込むのだと考えれば非常に面白く楽しい取組となる。
- 先生はエンターテイナーでなければならない。型にはめこむのではなく、広がりがあり自由を求めるような、楽しみやエンターテイメントを入れていく意識を持つといい。
- ICT の整備に加え、同時に AI に負けない子どもを作っていくことが必要であり、実際どんな力がつくから必要なのかを示すことが大事。
- ICT 支援員の役割を担うことのできる情報専科の教員の採用をしていく必要がある。
- ICT を活用したいが、どうしていいのかわからない教員がいる。教員になって 1 から勉強するのではなく、採用や育成の段階で、使えることが当たり前だというシステムにすべき。
- スマホで調べられる知識を覚えるのではなく、その知識を応用、活用できる人材がこれから求められる。